

十四 夜明けの海へ漁に出る漁船の音



「能登の朝は早くから沖へ出る漁船で賑わいます。夏の日差しに焼けた肌。力強く網を引く男たち。日本海の幸が目の前で踊ります。」



かいせつ



能登半島のほぼ中央に位置する七尾市は、古代より能登の玄関口として繁栄してきました。七尾市の東、観音崎から富山県氷見市に至る約30kmの海岸の総称を灘浦海岸と言い、このあたりは、定置網漁の先進地として有名です。定置網漁とは、岸から魚を誘導する垣場を張って、沖の身網に入ったところを捕る漁法で、古くよりこの地で行なわれていたとの記録があります。海底が深く入り組んだ絶好の天然漁港であることや能登半島が季節風をさえぎることが灘浦において定置網漁を発展させた理由でした。現在は、定置網漁の中でも明治41年(1908年)頃にその形態が完成した大敷網と呼ばれる大型定置網漁が盛んで、漁獲量も全国トップクラスです。灘浦沖には秋から冬にかけてブリが回遊し、その漁に港は大変な賑わいをみせます。能登では冷たい北東の風が吹き、雷が鳴ることを「鱒起こし」と呼び、人々は鱒起こしでブリの到来を知ります。ブリ漁が始まると、漁師たちの意気もあがり、夜明け前から出港する漁船の音すら活気づいて聞こえます。